

『慰める者となるために』 コリント人への手紙第二1章4～11節 2016.1.31(礼拝説教より)

『私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい。』 II テモテ 2:8

コリントの教会は多くの問題を抱えていたが、主の恵みにより歩むべき正しい道が示された。人生に苦難が何故ある？と問うとき、3つのことを思い出したい。

◆神様はあなたにとってどんな方なのか！『慈愛の父／すべての慰めの神(3節)』だと言う。人生のあらゆる場面で、思いやり深く、慈しみ深い神の慰めが私たちに満ちている(『慰め』が3～7節に10回も繰り返される)。慰めの意味は『傍に呼ぶ』の意。慰めとは、神が傍におられ、味方となり、守り、愛してくださると知ること。教会でよく「あなたは救われましたか？」と聞くことがあるが、それは「あなたは神の慰めがわかりましたか？」の意。慰めとは、ラテン語のフォルティス(強い・勇気ある)と関連がある。慰めを知った人は、心強くされ、あらゆる苦難と向き合う勇気を得る！『…その慰めは…苦難に耐え抜く力をあなたがたに与える(6節)』とある通りに！現実だけを見て『もうだめだ』と失望するか、神がどんな方かを思い出して元気を回復していただくか、選ぶことができる。

◆第二に神は、私たちに何をしてくださったのだろうか。『キリストの苦難が溢れているように、慰めもまたキリストによって溢れている(5節)』とある。人生に必要な慰めは、すべてイエス様を通して与えられる。イエス様が王の王、主の主となられたのは、彼が力強い支配者だからというより、悲しみの人、苦難のしもべだったから(ピリピ2章)だという。彼は鞭打たれ、唾を吐きかけられ、殴られ、茨の冠を被せられ、裸にされ、釘を打ち込まれ、槍で引き裂かれた。私たちの身代わりにその十字架を喜んで負われた方こそ、私たちの慰め主である。この方が『すべて疲れた人、重荷を負う者はわたしのもとに来なさい』と招かれる。ここに本当の慰めがあり、力と勇気の源がある。あなたは、もうこの方と出会っただろうか？

◆この方が願われるのは、慰めを知った者が、あらゆる苦難の中にいる者を慰める者となること(4節)。神は慰める者に「なれ」ではなく『なる』と言われる。苦難の中でキリストの十字架を仰ぎ、神の慈愛、慰めを思い出し、その苦しみの中で主とお会いした者からは、自ずと慰めが溢れ流れていく。慰め深くあれ！と言われなくても。
★今週、あなたを通して慰めを必要としている方に気づき、慰め深くあるために、あなたにできることがありますか？